4．保清・整容

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容		
中項目	転倒転落		
小項目	脱衣所・浴室での移動時（番号35・37合わせて）		
記載件数	14件		
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：58.5歳　　年齢層　41～60歳（4件 28.5%）		
	・脳梗塞、脳出血、麻痺	3件	21.4%
	・手術後の患者	2件	14.3%
	・高齢	2件	14.3%
	・骨折患者	2件	14.3%
	・肢体不自由・関節拘縮	3件	21.4%
発生状況の特徴	・発生時間：午前	8件	57.1%
	午後	6件	42.9%
	・学年：1年生	1件	7.1%
	2年生	5件	35.7%
	3年生	6件	42.9%
	4年生	2件	14.3%
	・最多実習日数：3日目	3件	21.4%
	・最多実習の種類：基礎看護学実習	5件	35.7%
	成人看護学実習	4件	28.6%
	老年看護学実習	1件	7.1%
	精神看護学実習	1件	7.1%
	総合看護学実習	1件	7.1%
	・最多発生場所：風呂場・脱衣場	12件	85.7%
学生の予見・予測的思考の特徴	・危険の予測を全くしていない	4件	28.6%
	・何となく危険を感じていても判断が出来なかった	5件	35.7%
	・危険を予測しても回避する援助行為に結びつかなかった	3件	21.4%
	・危険を予測し配慮し行動したが、十分ではなかった	1件	7.1%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・一つの行為（援助）に集中し、他の事柄・周囲に目を向けにくいために生じた	5件	35.7%
	・患者の状態を予測できていなかった	3件	21.4%
	・患者の症状など、他に気になることがあった	1件	7.1%
学生の事後の振り返り	・自分の行動・感情の振り返り・客観視	7件	50.0%
	・危険を予測しても回避する援助行為に結びつかなかった	2件	18.2%
	・確実に確認すればよかった	2件	14.3%
	・具体的な援助方法の工夫	7件	50.0%
	・人的・物的環境を整える必要性（周囲の対応・忙しさ・指導体制への要望）	1件	7.1%
	・自分の出来ることを明確にして、一人では無理せず助けを求める	1件	7.1%

	・すぐに教員や指導者に報告・相談すればよかった　1件　7.1%
	1）学生は何に気をつけるか ①移動の際、転倒の可能性のあった場面には、脱衣所－浴室間の歩行、車椅子－浴室の椅子間の移動、洗い場での座位－立位、洗い場－浴槽などがあった。 ②病棟の浴室の構造、転倒の可能性のある場所の確認をし、技術を習熟する。 ③事前に患者に気をつけて欲しいことを伝え、どのように学生が補助するかを話し合っておくこと。 ④一人で抱えきれない患者の場合には一人で行なわないこと。 ⑤万が一転倒した場合にはその場を離れず、ナースコールを押すこと。 2）指導者は何に気をつけるか ①事前の把握：患者の身体状況・行動特性、学生の体位保持の技術の習得状況 ②学生にはためらわずに助けを求めるように伝える。 ③実施時：患者の転倒の可能性が高いとき、一人で動いて転倒する危険性があるとき、また学生一人では患者の行動を抑制できないとき、教員自らあるいは看護師が学生と共にケアに入り、必要時援助する。 ④実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。
典型事例1	ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。 【事例】高齢のＡさんは、自立心が高く、自分のことは自分でしたいと考えている人です。大腿骨頸部骨折の手術をし、リハビリにて歩行訓練を始めていますが、それ以外は車椅子を使用しています。今日、手術後でははじめて浴室でシャワーを浴びることが許可されました。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	1）浴室に着くと同時に、患者がいきなり更衣室の椅子に座ろうと立ち上がり、よろけそうになった。予測しておらず慌てた。 →　患者さんが一人で立ち上がろうとすることが予測できていましたか？患者さんの行動特性をよく理解しておきましょう。 →　事前にどのような段取りで、シャワーを浴びるか、どの部分を援助するかを患者さんと打ち合わせましたか？ 2）患者が浴室に置いているシャワー用の椅子に座ろうとしてよろけ、椅子から落ちそうになった。 →　浴室の構造を事前に確認していましたか？ →　大きな段差や階段、敷居などつまずきやすいところはありますか？ →　手すりの位置を確認し、椅子が安定し、座りやすい位置に設置されているか確認しましょう。 3）よろけたが、学生一人では抱えきれなかった →　万が一、転倒したときに、患者を一人で抱えきれますか？ →　補助してくれる看護師や教員はいますか？ ※どの程度患者さんができるかを把握しながら、患者さんができる部分は患者さんに実施してもらいましょう。

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容
中項目	転倒転落
小項目	沐浴中（乳児）台から転落
記載件数	1件
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：0歳　　年齢層　0～9歳　　1件 100.0%
発生状況の特徴	・発生時間：午前　　1件 100.0%
	・学年：3年生　　1件 100.0%
	・実習日数：11～20日目　　1件 100.0%
	・実習の種類：母性看護学実習　　1件 100.0%
	・発生場所：沐浴室　　1件 100.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・危険を予測しても回避する援助行為に結びつかなかった　　1件 100.0%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・患者の状態を予測できていなかった　　1件 100.0%
学生の事後の振り返り	・具体的な援助方法の工夫　　1件 100.0%
	・患者の理解、病態の理解、知識をつける必要性　　1件 100.0%
	1）学生は何に気をつけるか ①小児の発達段階や健康状態に応じて、運動能力やその日の活動状態などを把握しておくこと。 ②新生児の沐浴など、溺水の恐れのある看護技術は、技術をしっかりと修得したうえで実施すること。まだ修得できていない場合には、一人では実施しないようにする。 ③指導者や教員の立ち会いの下で実施する場合には、学生と指導者・教員の両者ともに相手が児が転落しないように見ているだろうという誤った予測をもつことも考えられるので、その都度声をかけあって児の安全が保たれるようにすること。 2）指導者は何に気をつけるか ①学生の沐浴の看護技術の習得状況を確認し、危険な場合には一人では実施させないように調整をはかる。 ②指導者や教員の立ち会いのもとで実施する場合には、学生と指導者・教員の両者ともに相手が小児が転落しないように見ているだろうという誤った予測をもつことも考えられるので、その都度声をかけあい、責任をもって児の安全が保たれるようにすること。
典型事例1	ヒヤリハット事例から学びましょう 【事例】新生児のAちゃんの沐浴を行ないます。学生は学内でお人形を用いて、沐浴の練習をしてきましたが、初めてなので一人では自信がありませ

	ん。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	1）沐浴準備中、お湯の温度を確かめるために児から目を離したすきに、児が台から滑り落ちそうになる。 →　つねに児から目を離さないようにする方法はありますか？ →　目を離していても児の安全が図れるような方法はありますか？ 2）沐浴準備中、動いた拍子にバスタオルがひっかかり、その上に寝かされていた児が転落しそうになる。 →　危険な要因はありませんか？

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容		
中項目	転倒転落		
小項目	入浴・シャワー中		
記載件数	8件		
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：63.4歳　　年齢層　71～80歳	3件	37.5%
	・がん	3件	37.5%
発生状況の特徴	・発生時間：午前	5件	62.5%
	午後	3件	37.5%
	・学年：1年生	1件	12.5%
	2年生	4件	50.0%
	3年生	3件	37.5%
	・最多実習日数：5日目	2件	25.0%
	・最多実習の種類：基礎看護学実習	3件	37.5%
	成人看護学実習	1件	12.5%
	老年看護学実習	1件	12.5%
	小児看護学実習	1件	12.5%
	精神看護学実習	2件	25.0%
	・最多発生場所：風呂・脱衣場	8件	100.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・危険の予測を全くしていない	4件	50.0%
	・危険を予測しても回避する援助行為に結びつかなかった	2件	25.0%
	・危険を予測し、回避できた	1件	12.5%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・一つの行為（援助）に集中し、他の事柄・周囲に目を向けにくいために生じた	2件	25.0%
	・実習場・学習上のスケジュールによる切迫感と患者に必要な援助との優先順位がつけられなかったために生じた	1件	12.5%
	・患者に次の予定（検査・リハビリなど）が入っていた。	1件	12.5%
	・患者の情報・状態を把握していなかった。	1件	12.5%
	・患者の状態を予測できていなかった。	1件	12.5%
	・自分の技術・知識があやふやで不安	1件	12.5%
学生の事後の振り返り	・自分の行動・感情の振り返り・客観視	3件	37.5%
	・具体的な援助方法の工夫	3件	37.5%
	・対処しようがない	1件	12.5%
	・自分の出来ることを明確にして、一人では無理せず助けを求める	2件	25.0%
	・患者の理解、病態の理解、知識をつける必要性	1件	12.5%
今後の指導上の工夫	1）学生は何に気をつけるか ①浴室等の構造を事前に調査し、転倒せずに介助できる方法を考え、アドバイスを得ること。一人で実施出来ない、やったことがない場合には、必ず助		

	けを求める。 ②万が一転倒した場合には、その場を離れず、ナースコールを押すこと。 2）指導者は何に気をつけるか ①事前の準備状況の把握：患者の移動能力、転倒の危険性。学生の技術習得状況を把握しておく。 ②実施時：患者の転倒が予測される場合には、学生と共にケアに入り、見守る。必要時援助する。見本となる。 ③実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。
典型事例１	【事例】高齢のＡさんは肺がん再発で入院中です。長い間臥床生活が続いていることと、Ａさん自身、保清に積極的でないこともあり、近寄ると体臭がします。看護師の勧めにより、シャワーを浴びることにしました。学生がＡさんのシャワー介助を行なうことを計画しました。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	ヒヤリ・ハット件から学びましょう。 1）患者の体臭などに気をとられて、清潔のことしか念頭にないと危険です。まず安全を確保しましょう。 2）過去のヒヤリハット事例では、筋力低下や麻痺のある患者では立位のままバランスを崩す、椅子に坐っていてバランスを崩し、転倒しかけるという場面があります。 → 患者の移動や姿勢保持の能力を事前にアセスメントします。事例の患者もがんで長期臥床していましたから、本人が自覚しているよりも筋力が低下しているかもしれません。 3）過去のヒヤリハットでは、入浴中、滑って転倒の可能性のある場所として、水で濡れている浴室、脱衣所、廊下、洗面所などがあります。 → 病棟の浴室の手すりを確認する他、水気を拭いたり、転倒を防ぐマットなどを使用しましょう。 4）患者が浴室の洗い場で洗面器のお湯に足を浸したまま、立ち上がろうとしたなどの場面もあります。 → 患者と声をかけあって、安全を確保しましょう。

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容		
中項目	転倒転落		
小項目	気分不良		
記載件数	4件		
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：50.0歳　　年齢層　61～70歳	2件	50.0%
	・がん	2件	50.0%
発生状況の特徴	・発生時間：午前	1件	25.0%
	午後	3件	75.0%
	・学年：2年生	2件	50.0%
	3年生	2件	50.0%
	・最多実習日数：特になし		
	・最多実習の種類：基礎看護学実習	1件	25.0%
	成人看護学実習	2件	50.0%
	小児看護学実習	1件	25.0%
	・最多発生場所：病室	3件	75.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・何となく危険を感じていても判断が出来なかった	2件	50.0%
	・危険を予測しても回避する援助行為に結びつかなかった	2件	50.0%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・一つの行為（援助）に集中し、他の事柄・周囲に目を向けにくいために生じた	2件	50.0%
	・実習場・学習上のスケジュールによる切迫感と患者に必要な援助との優先順位がつけられなかったために生じた	1件	25.0%
	・指導者を待っていたが、来てもらえず（焦って）実施した	1件	25.0%
	・はじめての技術内容・実習、それに伴う緊張・焦り	1件	25.0%
	・自分の技術・知識があやふやで不安	1件	25.0%
学生の事後の振り返り	・自分の行動・感情の振り返り・客観視	2件	50.0%
	・具体的な援助方法の工夫	2件	50.0%
	・自分の出来ることを明確にして、一人では無理せず助けを求める	1件	25.0%
	1）学生は何に気をつけるか ①ほとんどの原因が時間のかかりすぎであった。清拭、更衣、洗髪などに時間がかかりすぎ、酸素飽和度が80%まで低下した、疲労させた、不快感を与えた、気分不良になったなどがあった。 ②患者のその日の体調を事前に確認しておくこと。患者への負担や疲労度を鑑み、ケアの方法や時間を検討し、助言を得ること。 ③患者の体調が変化しやすい場合には、一人では実施せず、必ず助けを求めること。 ④万が一、患者の急変に立ち会ったときには、その場を離れず、ナースコールを押すこと。		

	2）指導者は何に気をつけるか ①事前の準備状況の把握：患者の体調の変化など。 ②実施時：体調の変化が激しい患者では、学生一人でケアさせず、見守ること。 ③実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。
典型事例１	【事例】85歳のＡさんは婦人科がんの再発で入院しました。るいそうも著明です。夜間、発熱したので、清拭をし、衣類を交換して欲しいとの訴えがありました。あなたはＡさんにベッド上での清拭と更衣の援助を計画しました。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。 1）患者の状態がいつもよりも悪い印象があった。 → 患者のその日の体調を事前に確認しておきましょう。事例の患者の場合、がんで衰弱している上、前日の発熱で体力を消耗していると思われます。いつもよりも良くない印象をもった場合にはなおさら、バイタルサインズを確認し、指導者に相談することが大切です。 2）清拭や衣類の交換をていねいに行なうことに集中していた。 → ケアをていねいに行なうことも大切ですが、患者のその日の体調に合わせて、患者への負担や疲労度を考え、指導者や教員とケアの方法や時間について助言を得ましょう。 3）時間がかかってしまった。 → 清拭や衣類交換の技術に習熟しておきましょう。 → 必要であれば２名で行なうと、短時間に済ませることができるでしょう。 4）患者の状況を予測できなかった。 → 状態の急激な変化が予測される場合には、必ず指導者か教員が共に実施すること。学生が予測できていない場合には、認識できるような指導が必要である。

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容		
中項目	溺水・誤嚥		
小項目	お風呂・沐浴で溺れる		
記載件数	3件		
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：0.7歳　　年齢層　0～20歳	3件	75.0%
	・小児・新生児	3件	75.0%
	・高齢	1件	25.0%
発生状況の特徴	・発生時間：午前	2件	50.0%
	・学年：3年生	3件	75.0%
	・最多実習日数：1日目、2日目、6日目	各1件	25.0%
	・最多実習の種類：小児看護学実習	2件	50.0%
	母性看護学実習	1件	25.0%
	・最多発生場所：病室、風呂・脱衣場	各1件	25.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・危険の予測を全くしていない	1件	25.0%
	・何となく危険を感じていても判断が出来なかった	1件	25.0%
	・危険を予測しても回避する援助行為に結びつかなかった	2件	50.0%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・大丈夫だろう（一人でできる）という思いこみ	2件	50.0%
	・患者の症状など他に気になることがあった	1件	25.0%
	・はじめての技術内容・実習、それに伴う緊張・焦り	1件	25.0%
	・自分の技術・知識があやふやで不安	1件	25.0%
学生の事後の振り返り	・規定の手順に沿うことの重要性	2件	50.0%
	・確実に確認すればよかった	1件	25.0%
	・対処しようがない	1件	25.0%
	・すぐに教員や指導者に報告・相談すればよかった	1件	25.0%
	・人的・物的環境を整える必要性（周囲の対応・忙しさ・指導体制への要望）	1件	25.0%
今後の指導上の工夫	1）学生は何に気をつけるか ①入浴中の乳幼児の保持の仕方をイメージして練習すること。特に人形とは異なり、乳児は動くことを想定して、練習すること。 ②高齢者の場合、姿勢保持にどのようなリスクが伴うのか、麻痺はあるか、安全ベルトの利用は必要かなどを理解して、入浴介助を実施すること。 ③一人で実施出来ない、やったことがない場合には、必ず助けを求めること。 2）指導者は何に気をつけるか ①事前の準備状況の把握：沐浴・入浴時のケアの留意点を確認する。特に対象者の安全に関わることは必ず確認する。高齢者の場合：安全ベルトをする意味。乳児の場合：安全な固定（保持）方法。その行為の中で、初心者が犯しやすいミスを具体的に伝えておく。		

	②実施時：初めての援助の場合には、学生と共にケアに入り、見守る。必要時援助する。見本となる。 ③実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。
典型事例１	【事例】高齢のＡさんの入浴介助を行うことになりました。Ａさんは、ストレッチャーや車椅子で移動をするときに、必ず安全ベルトを胴体につけています。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。 入浴中にベルトがゆるんで、患者さんが溺れそうになった。 → 患者さんがどの程度、自分で姿勢の保持ができるか確認しておきましょう。ずり落ちないようにするための安全ベルトの使用はどのようにしますか？入浴介助時の姿勢の補助について学習して、具体的なポイントを挙げてから実践してみましょう。
典型事例２	【事例】乳児Ｂちゃんの沐浴を予定しています。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。 １）・学生の手が安定せず沐浴槽内に児を沈めそうになった ・沐浴時、支えきれず、湯の中に落としそうになった。 → ・動く児を沐浴させるにあたり、支持することの難しさがあります。 ・沐浴の行為は、児を「支持」し、片方の手で「洗う」ため、両手で同時に行うというという課題があります。 ・「しっかりと支える」とは、具体的にどのように支えることなのか、ポイントを整理して練習する必要があります。 ・動く児を片手で支えるという行為は、ある程度の経験がないと難しいので、初めての時には、一人で行わずに援助を求めましょう。

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容			
中項目	溺水・誤嚥			
小項目	入浴、シャワー時、気管切開部にお湯が入る			
記載件数	2件			
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：39.5歳	年齢層　0～20、71～80歳	各1件	50.0%
	・骨折・捻挫		1件	50.0%
	・乳児・小児		1件	50.0%
	・医療機器の装着		1件	50.0%
発生状況の特徴	・発生時間：午前		2件	100%
	・学年：2年生		1件	50.0%
	3年生		1件	50.0%
	・最多実習日数：3日目、4日目		各1件	50.0%
	・最多実習の種類：基礎看護学実習		1件	50.0%
	小児看護学実習		1件	50.0%
	・最多発生場所：病室、風呂・脱衣場		各1件	50.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・何となく危険を感じていても判断が出来なかった		1件	50.0%
	・危険を予測しても回避する援助行為に結びつかなかった		1件	50.0%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・一つの行為（援助）に集中し、他の事柄・周囲に目を向けにくいために生じた		1件	50.0%
	・患者の症状など、他に気になることがあった		1件	50.0%
学生の事後の振り返り	・具体的な援助方法の工夫		1件	50.0%
	・すぐに教員や指導者に報告・相談すればよかった		1件	50.0%
	・人的・物的環境を整える必要性（周囲の対応・忙しさ・指導体制への要望）		1件	50.0%
今後の指導上の工夫	1）学生は何に気をつけるか ①気管切開をしている人の注意点を復習する。気管切開部に水が入るということは、気管→肺へ水が入ることにつながり、大変危険である。 ②一人で実施出来ない、やったことがない場合には、必ず助けを求めること。 ③清拭のみに注目するのではなく、気管切開部に水が入らないことにも着目する。 ④自信がないまま実施してしまうことのリスクの検討。 2）指導者は何に気をつけるか ①事前の準備状況の把握：気管切開をしている人の入浴時の留意点を確認する。 ②実施時：学生と共にケアに入り、見守る。気管切開をしている人の入浴介助はリスクが伴うため、学生一人で実施することがないように指導体制を整える。威圧感を与えない話し方や見守りをする。 ③実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。 ④指導者に声をかけることのできやすい環境づくりをする。			

<table>
<tr><td rowspan="3">典型事例１</td><td>【事例】気管切開をしているＡさんの入浴介助を行います。</td></tr>
<tr><td>学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？
考えられるリスクはどんなことですか？</td></tr>
<tr><td>ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。

１）人工呼吸を装着した小児の沐浴中、挿入チューブから湯が入りそうになった。

２）入浴時気管切開部にお湯が入った。

→　・気管切開をしている人の注意点を復習する。気管切開部に水が入るということは、気管→肺へ水が入ることにつながり、大変危険である。
・一人で実施出来ない、やったことがない場合には、必ず助けを求めること。あいまいなまま一人で実施しない。
・入浴のみに注目するのではなく、気管切開部に水が入らないことにも着目する。
・実施前後で、呼吸状態の確認を行う。(呼吸数、呼吸音、酸素飽和度)</td></tr>
</table>

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容		
中項目	熱傷・創傷・粘膜損傷		
小項目	入浴、シャワー、洗髪、陰部洗浄、手足浴時に熱傷		
記載件数	4件		
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：75.8歳　　年齢層　71～80歳	3件	75.0%
	・脳梗塞、脳出血、麻痺のある患者	1件	25.0%
	・認知症症状、見当識障害	1件	25.0%
	・手術後の患者	1件	25.0%
発生状況の特徴	・発生時間：午前	4件	100.0%
	・学年：1年生	2件	50.0%
	2年生	1件	25.0%
	3年生	1件	25.0%
	・最多実習日数：3日目、4日目、10日目	各1件	25.0%
	・最多実習の種類：基礎看護学実習	3件	75.0%
	老年看護学実習	1件	25.0%
	・最多発生場所：病室	3件	75.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・危険の予測を全くしていない	3件	75.0%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・一つの行為（援助）に集中し、他の事柄・周囲に目を向けにくいために生じた	1件	25.0%
	・患者の症状など他に気になることがあった	1件	25.0%
	・はじめての技術内容・実習、それに伴う緊張・焦り	1件	25.0%
学生の事後の振り返り	・自分の行動・感情の振り返り・客観視	1件	25.0%
	・確実に確認すればよかった	3件	75.0%
	・具体的な援助方法の工夫	1件	25.0%
	・対処しようがない	1件	25.0%
今後の指導上の工夫	1）学生は何に気をつけるか ①清拭・陰部洗浄・入浴などの際の湯の温度の確認方法を調べて、実施する。（腕の内側に湯をあてて確認する） ②一人で実施出来ない、やったことがない場合には、必ず助けを求めること。 ③1つのことのみ（例：裸で寒くないだろうか？　恥ずかしくないだろうか？）に気をとられず、一つ一つの手技・ポイントを復習して、練習した上で実施する。 2）指導者は何に気をつけるか ①事前の準備状況の把握：熱傷を防ぐコツ、湯温の確認方法を知識として得ているか？実施できるか。（練習しているか） ②実施時：学生と共にケアに入り、見守る。必要時援助する。見本となる。焦らせないようにして、一つ一つ丁寧に実施できるように見守る。		

	③実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。
典型事例１	【事例】高齢のＡさんは、筋力低下があり、ベッド上で過ごしています。 Ａさんのところに陰部洗浄に行きました。熱傷しないようにケアを計画し、実施してみましょう。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。 1）湯の温度を確認せず、熱めのお湯をかけて驚かせてしまった。 2）陰部洗浄で、お湯の温度の確認を怠り、お湯が少し熱かった。 3）清拭タオルを熱いといわれた。 4）「患者さんが裸で寒くないだろうか？」など他のことに気を取られて湯の温度の確認を怠った。 5）早くしなくてはと焦って、湯の温度の確認を怠った。 → ・湯の温度、タオルの温度は、どのように確認するか復習して、練習してみましょう（上肢の内側で確認します） ・陰部は、通常の皮膚よりも敏感です。 ・声かけをしながら、湯の温度を患者にも確認してもらいながら、援助を進めましょう。 ・清潔ケア時には、留意することがたくさんありますが、湯の温度（タオルの温度）の確認は、熱傷を防ぐ上からも大切です。 ・焦ると確認を怠りやすくなります。焦らないで実施できるように、事前に何度も練習して、自信をつけておきましょう。

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容
中項目	熱傷・創傷・粘膜損傷
小項目	入浴、シャワー、洗髪、陰部洗浄、手足浴時に皮膚を損傷
記載件数	1件
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：91歳　1件 100.0%
	・脳梗塞、脳出血、麻痺のある患者　1件 100.0% ・意識レベルの低下　1件 100.0% ・皮膚の弱い人　1件 100.0%
発生状況の特徴	・発生時間：午前　1件 100.0%
	・学年：2年生　1件 100.0%
	・最多実習日数：6日目　1件 100.0%
	・最多実習の種類：基礎看護学実習　1件 100.0%
	・最多発生場所：風呂・脱衣場　1件 100.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・その他　意味不明
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・一つの行為（援助）に集中し、他の事柄・周囲に目を向けにくいために生じた　1件 100.0%
学生の事後の振り返り	・規定の手順に沿うことの重要性　1件 100.0%
今後の指導上の工夫	1）学生は何に気をつけるか ①清潔ケア時に皮膚を傷つけるリスクがあることを知り、力加減を事前に練習しておく。 ②一人で実施出来ない、やったことがない場合には、必ず助けを求めること。 ③対象となる人の皮膚の状態を事前にアセスメントして、力加減がどのくらいがよいかイメージしておく。 ④清潔ケアの手技に夢中になり、患者への関心（力加減の確認や苦痛の有無など）が疎かにならないように実施する。 2）指導者は何に気をつけるか ①事前の準備状況の把握：皮膚損傷のリスク。対象者の皮膚の状態と力加減。 ②実施時：学生と共にケアに入り、見守る。必要時援助する。見本となる。威圧的な態度をとらない。 ③実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。
典型事例1	【事例】皮膚が弱い高齢のAさんに、清拭をします。
	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？

	ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。 1）皮膚の弱い患者の清拭をしたときに、手技に夢中になっていた。終了後、腕の皮膚が少し傷ついていることに気づいた。 → ・皮膚の弱い方という情報から、保清を行う際の力加減や清拭剤の使用について、事前に検討してみましょう。皮膚が弱い人には、力加減は弱めにします。 ・保清時には、皮膚の観察を怠らないようにします。 ・手技に夢中になり、患者自身への関心が薄れ、気遣いがなくなってしまうと危険です。声をかけながら、苦痛がないかを確認しながら実施しましょう。

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容
中項目	熱傷・創傷・粘膜損傷
小項目	口腔ケア時、出血
記載件数	2件
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：45.0歳　年齢層　0～20、61～70歳　各1件　50.0%
	・脳梗塞、脳出血、麻痺のある患者　1件　50.0% ・肢体不自由・関節拘縮　1件　50.0% ・高齢　1件　50.0%
発生状況の特徴	・発生時間：午前・午後　各1件　50.0%
	・学年：2年生　1件　50.0% 3年生　1件　50.0%
	・最多実習日数：1日目、5日目　各1件　50.0%
	・最多実習の種類：基礎看護学実習　1件　50.0% 小児看護学実習　1件　50.0%
	・最多発生場所：病室　2件　100.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・危険の予測を全くしていない　2件　100.0%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	その他　2件　100.0% （出血は、口腔ケア前のナースのサクションによるものかもしれない）
学生の事後の振り返り	・自分の行動・感情の振り返り・客観視　1件　50.0%
	・すぐに教員や指導者に報告・相談すればよかった　1件　50.0%
今後の指導上の工夫	1）学生は何に気をつけるか ① 口腔ケア時に出血のリスクがあることを、事前に学習し工夫点を考えながら練習をする。（力の入れ具合、意識障害などがある患者で指示動作が困難な場合など） ②一人で実施出来ない、やったことがない場合には、必ず助けを求めること。 ③出血した場合には、指導者にすぐに報告して対応する。 2）指導者は何に気をつけるか ①事前の準備状況の把握：出血を防ぐコツ、力の入れ具合、指示動作が困難な患者（意識障害患者など）の実施方法を知り、実施できるか（練習しているか）。 ②実施時：学生と共にケアに入り、見守る。必要時援助する。見本となる。焦らせないようにして、一つ一つ丁寧に実施できるように見守る。 ③実施後：振りかえりを行う。ヒヤリ・ハットを、次につなげるような助言を行う。
典型事例1	【事例】重症心身障害者のAさんの口腔ケアを行います。 Aさんは指示動作に応じることが難しいようです。

	学生：あなたは、どんなことに注意しようと思いますか？ 考えられるリスクはどんなことですか？
	ヒヤリ・ハット事例から学びましょう。 1）重症心身障害者の口腔ケア中、歯ブラシを噛んで磨けなくなったので、引っ張ったら出血してしまった。 2）口腔ケアをしていて出血し、自分が傷つけたのではないかとヒヤリとした。 →　・口腔ケア時、どんなことで出血が起こりますか？ 力の入れ具合、無理矢理に歯ブラシを入れる・外すなど。 患者さんに出血傾向はありませんか？ ・歯ブラシ以外の口腔ケア用具を知っていますか？ やわらかい豚毛の歯ブラシや、スポンジ式の歯ブラシもあります。出血傾向にある患者や、抵抗が激しい患者の場合は、スポンジ式のものなど、リスクの少ないものを使いましょう。 ・その患者さんの口腔ケアは、普段どのように実施されていますか？ 上手くできたときのコツは何でしょうか？ はじめてのケアで自信がないときには、指導者に助けを求めましょう。

学生の看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験発生の構造

大項目	保清・整容		
中項目	熱傷・創傷・粘膜損傷		
小項目	爪切りで深爪、切傷、出血		
記載件数	6件		
患者の心身状況、疾患の特徴	・患者平均年齢：75.5歳　　年齢層　71～80歳	3件	50.0%
	・脳梗塞・脳出血・麻痺	4件	66.7%
	・臥床（寝たきり・衰弱・筋力低下・安静）	3件	50.0%
	・骨折	1件	16.7%
	・認知症症状・見当識障害	1件	16.7%
	・統合失調症などの精神疾患	1件	16.7%
	・高齢	1件	16.7%
	・透析患者	1件	16.7%
発生状況の特徴	・発生時間：午後	4件	66.7%
	・学年：3年生	3件	50.0%
	・最多実習日数：2、4、7、8日目、11～20日目	各1件	16.7%
	・最多実習の種類：基礎看護学実習	3件	50.0%
	老年看護学実習	2件	33.3%
	・最多発生場所：病室	6件	100.0%
学生の予見・予測的思考の特徴	・危険の予測を全くしていない	4件	66.7%
	・何となく危険を感じていても判断が出来なかった	1件	16.7%
	・危険を予測し配慮し行動したが、十分ではなかった	1件	16.7%
実施中の学生の思考の特徴・多重課題の存在	・1つの行為に集中し、他の事柄・周囲に目を向けにくかった	1件	16.7%
	・実習場・学習上のスケジュールによる切迫感	2件	33.3%
	・教員・指導者の視線・口調に緊張・焦りを生じた	2件	33.3%
	・はじめての技術内容・実習、それに伴う緊張・焦り	1件	25.0%
	・自分の技術・知識があやふやで不安	1件	25.0%
学生の事後の振り返り	・自分の行動・感情の振り返り	1件	16.7%
	・規定の手順に沿うことの重要性	1件	16.7%
	・具体的な援助方法の工夫	1件	16.7%
	・すぐに教員や指導者に報告・相談すればよかった	1件	16.7%
	・自分でできることを明確にして、一人では無理せずに助けを求める	2件	33.3%
今後の指導上の工夫	1）学生は何に気をつけるか ①患者の爪は、どのような性状か確認する。肥厚している場合は、通常の爪切りでは難しいためニッパー等を用いる。 ②爪切り前の準備（足浴・手浴によって爪をやわらかくするとよい。） ③視線や姿勢を自分が爪を切るときと同じようにして、深爪・出血を避ける。		